秀賞

夢への大きな第一歩

福島県会津若松市立第四中学校
３年　髙津　朱里

今の私が未来の自分へ伝えたいこと。それは、薙刀（なぎなた）は何があっても続けてほしい、ということだ。

年の離れた従兄弟の影響で薙刀部に入った私は、何の目標もなく、ただ楽しく部活動に取り組んでいた。私たちの学年は、一つ上の先輩たちの人数の半分しかいない、４人の学年だった。人数が少なかったが、きっとどの友達よりも長く一緒にいたであろう大切な仲間だ。しかし、仲間たちとの薙刀が楽しいという気持ちは長く続かず、練習に遅れていくことが多くなった。

薙刀には、指定された形を対人で行い競う演技競技、防具を身につけ定められた部位を打突して勝敗を競う試合競技、大将・中堅・先鋒と役割を分けて、３人一組で試合競技を行う団体戦がある。私は、緊張感のある演技競技よりも、伸び伸びと動き回れる試合競技が好きだった。最初は全然動けず、相手の動きをただ見ているだけだったが、動くことが好きな私だったら、試合競技でもっと自分から攻めることができるのではないか、と思うようになった。

そして、やっとやる気が向上してきた頃、私たちは最上級生になっていた。今までは先輩たちが団体戦に出場していたが、引退してしまったため、私たち４人のうち３人のみが団体メンバーに選ばれることになる。憧れだった団体戦。私は新たな目標に向けて、必死で練習をした。その成果が出たのか、私は中堅という大事な役割に選ばれた。去年までは強豪校がずっと１位を取り続けていたため、今年こそは連覇を食い止めて、今度は私たちが強豪校と言われるようになりたい、と強く思った。大会が近づくにつれて、対戦相手一人一人の分析をし、自分の弱点をノートに書き出した。そして、県大会当日、強豪校への第一歩、個人試合１位を勝ち取ることができた。さらに、団体戦で優勝することができた。自分に自信がつき、ただ何となくやっていた部活が、今までの２倍楽しくなった。次はもっと大きな目標を達成してみたい。そして私は、「東北大会入賞、全国大会出場」という目標に向かって、残りの時間、さらに練習に励んだ。

私が大会当日に必ず聞く曲の中に、こんな歌詞がある。「私の夢はみんなの願い。」誰よりも私のことを想い、誰よりも近くで応援してくれる家族。私たちそれぞれが夢をかなえられるよう、懸命に指導してくださる先生方。私の周りには、こんなにも心から応援してくれる人がいる。その期待に少しでも応えたい

と思える歌詞だ。また、「どんな一歩も無駄にはならない」という歌詞もある。勇気を出して踏み出した一歩が、たとえどんな一歩であろうと、決して無駄にはならず、結果がどうであれ自分は満足したと言い切れるような試合がしたいと思える歌詞だ。どちらも、当時の私にはぴったりと当てはまるものだった。音楽は素晴らしい、としみじみ思う。メロディーと歌詞の二つだけで、こんなにも人の感情を動かし、勇気を与えてくれるのだから。

全国大会出場への切符がかかった最初で最後の東北大会。演技競技、試合競技は惜しくも入賞を逃したが、団体戦では粘り強く戦い、目標だった３位に入賞することができた。３年間、全力で頑張ってきて、やっと掴んだ人生で初めての銅メダルは、とても重かった。そして、一番の目標だった全国大会出場の夢もかなえることができた。日本一のトロフィーを持って帰ることはできなかったが、私の人生においてとても大きな経験となった。

部活を引退した今、思うことは、やればやった分だけ夢に近づけるということと、無理に完璧に見せようとせず、自分がもっている 100 パーセントの姿を見せればよいということだ。自分の思い通りにできず、投げ出したくなる日は誰にだってある。私自身、きっとこれからもたくさんあるだろう。しかし、それを乗り越えた者のみが味わえる喜びや達成感がある。薙刀で培った経験が生かせる日が来るまで、自分らしく一歩一歩頑張っていきたいと思う。